

更衣動作を中心とした病棟内訓練が日常生活動作（ADL） の向上に与える影響

伊賀雄¹⁾ 橋本卓郎¹⁾ 松尾有里¹⁾ 西田由紀子¹⁾ 水口大輔²⁾ 福田哲也²⁾ 五百川明子¹⁾
山口隆夫¹⁾ 中川康江³⁾

1)国立病院機構鳥取医療センター看護部 9 病棟

2)鳥取医療センターリハビリテーション科

3)鳥取看護大学看護学部看護学科講師

Effects of in-ward training focusing on dressing activity on the activities of daily living (ADL)

Takeshi Iga¹⁾, Takuro Hashimoto¹⁾, Yuri Matsuo¹⁾, Yukiko Nishida¹⁾,
Daisuke Mizuguchi²⁾, Tetsuya Fukuda²⁾, Akiko Iogawa¹⁾,
Takao Yamaguchi¹⁾, Yasue Nakagawa³⁾

1) The 9th Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center

2) Department of Rehabilitation, NHO Tottori Medical Center

3) Department of Nursing, School of Nursing, Tottori College of Nursing

要旨

A 病院 B 病棟は、脳血管疾患や骨折後の患者を主な対象とした回復期リハビリテーション病棟である。回復期リハビリテーション病棟協会では、看護師が行う看護援助の目標を掲げている。その中で、B 病棟では更衣に介助が必要な患者において、朝、夕の更衣が実施できていない状況にあった。また、更衣動作を中心とした病棟内訓練に関する先行研究は少ない。そこで、B 病棟に入院中の脳血管疾患患者 3 名に対して、更衣動作を中心とした病棟内 ADL 訓練を行った。更衣は患者主体に行い、朝、夕の 1 日 2 回の訓練を 1 ヶ月間実施した。その結果、更衣動作が自立しただけでなく、座位や立位バランス等の身体機能、およびトイレ動作や移動動作等の ADL の向上が認められた。鳥取臨床科学 11(2), 87-91, 2019

Abstract

The Ward B in the A Hospital is a recovery phase rehabilitation ward mainly for patients with post-cerebrovascular diseases and post-fractures. Kaifukuki Rehabilitation Ward Association has been established to assist improvement of nursing skills. Among them, changing clothes of the patients who require assistance for dressing in the morning and evening was not implemented in the ward B. The previous studies which examined the 'in-ward' training focusing on dressing are limited. Therefore, we implemented an 'in-ward' training focusing on dressing activity for 3 patients with cerebrovascular diseases. Dressing was performed mainly by the patients

and the training was carried out twice daily in the morning and evening for 1 month. As a result, the patients became independent with dressing activity, and also improved not only physical function including sitting and standing balance, but also ADLs including toileting and transferring. Tottori J. Clin. Res. 11(2), 87-91, 2019

Key words: 回復期リハビリテーション病棟, 日常生活動作 (ADL), 更衣訓練, 脳血管疾患, 日常生活の看護援助; recovery phase rehabilitation ward, activity of daily living (ADL), dressing training, cerebrovascular diseases, nursing assistance on daily living

はじめに

A 病院 B 病棟は、脳血管疾患や骨運動器疾患の患者を主に対象とした回復期リハビリテーション病棟であり、自宅退院に向けてリハビリを行い、activities of daily living (以下 ADL と略す) が向上することを目的としている。また、B 病棟は脳血管疾患の後遺症による片麻痺や高次脳機能障害、認知症のある患者もおり、移動、排泄、更衣、入浴等の日常生活に介助が必要な患者が多い。回復期リハビリテーション病棟協会による「回復期リハビリテーション病棟 10 か条」では、病棟の看護師が行う「ケア 10 項目宣言」として、日常生活における看護援助の目標を掲げている。そのなかには、更衣に関しても「日中は普段着で過ごし、更衣は朝夕実施しよう」と明記されている。B 病棟では、入院患者全員に対して平日に週 2 回以上の入浴を実施している。

しかし、入浴日でない日は尿・便失禁等の汚染時以外は更衣を行っておらず、ほとんどの患者が病衣のまま日中も過ごし、リハビリテーションを行っている現状がある。病棟スタッフ全員を対象としたアンケートでも、「ケア 10 項目宣言」のうち、更衣が行えていないという回答が最も多かった。

更衣動作は、日常生活の場面においても排泄や入浴の場面で必要な動作であり、更衣以外の ADL の向上に繋がると考えられる。しかし、更衣動作を中心とした病棟内訓練の研究を行ったものは少ない。そこで、脳血管疾患後遺症により更衣動作に介助が必要な患者に対して、更衣を中心とした病棟内訓練を行うこ

とが入院患者の ADL の向上に繋がることを明らかにしたいと考えた。

I. 研究目的

脳血管疾患後遺症により更衣動作に介助が必要な患者に、更衣訓練を行うことで、ADL が向上することを目的とする。

II. 研究方法

1. 研究期間

20XX 年 9 月～20XY 年 3 月 31 日。

2. 研究対象

研究の主旨に同意の得られた患者で、脳血管疾患により B 病棟に入院中で、入院時の機能的自立度評価法 (以下 FIM と略す) の「している ADL」の運動項目の点数が 40 点未満、かつ認知症スクリーニング検査 (以下 MMSE と略す) が 22 点以上の患者を対象とした。または、MMSE が 22 点未満でも、ナースコールが押せる、危険行動がない等、認知機能の低下によって病棟生活を送ることが困難ではなく、会話での意思疎通が可能な患者 3 名も対象に含めた。なお、FIM の「している ADL」とは、実際に病棟における日常生活で行っている ADL、「できる ADL」とは、介助者がいる場面で最大限の能力を使ってできる ADL を、それぞれ FIM の評価方法に沿って点数化したものである。

3. データ収集方法

- 1) 入院時に看護師が評価した FIM の「している ADL」とリハビリスタッフが評価した MMSE の点数をもとに、対象患者を決定した。
- 2) 対象患者に対して、更衣を朝・夕の 1 日 2